

Gideon Story from the Strategical Viewpoint

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-10-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 哲夫 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/253

ギデオン物語における戦略と戦術¹⁾

佐々木 哲 夫

I

ギデオン物語(士師 6:1-8:35) を解釈する立場は、二つに大別される。第一は通時的 (diachronic) 立場である。例えば、部族の口頭伝承が五書資料の著者によって文書化されたとの編集過程を前提にする解釈は、ギデオン物語を E 資料と J 資料に分類した。この試みは、資料同定の困難さの故に支持されなかった²⁾。さらに、士師記が口頭伝承や記録伝承の一回か二回の編纂によって構成されたと想定する申命記史家的編集による解釈は、資料として「ギデオン」と「エルバアル」の名前に由来する二つの伝承を想定するが、ギデオン物語の戦争の記事を 7 章と 8 章には分割していない³⁾。G・フォン・ラートは、7 章と 8 章に聖戦の基準を適用し、並行する二つの伝承、即ち、オレブとゼエブに対する戦い (7:1-8:3) とゼバとツァルムに対する戦い (8:4-21) の二つを想定し、編纂過程で一つに構成されたと考えた⁴⁾。問題にされているのは、文書化の時期や編集過程の推定である。しかし、編集時期をヨシア時代や捕囚期に設定する場合においても、ギデオン物語を含む中核部分 (3:7-16:31) の口頭伝承の時期は、八世紀に推定されている⁵⁾。他方、吟遊詩人により伝承された部族相互の独立した物語が王国時代の初期に士師記全体として文書化されたとの想定や、伝達過程において段階的に連続してつなぎあわされて形成されたとの想定も提起されている⁶⁾。いずれにおいても、ギデオン物語は口頭伝承の形態において士師時代に遡り得ると理解されている。

第二は共時的 (synchronic) 解釈である。この解釈は、伝承や編集段階ではなく旧約聖書の最終形態に注目する立場である⁷⁾。例えば、D.W. Gooding は、士

師記全体を交差構造に分析し、その中心部分 (focal point) をギデオン物語とする⁹⁾。また、J. Paul Tanner も、交差構造の分析により、ギデオン物語の中心部分を7章1節から11節としている⁹⁾。しかし、ギデオン物語を戦争に関する戦略的視点から吟味するならば、ギデオンの戦いの記事全体において、歴史性と関連する漸進的展開を読み取れるのではないかと考える¹⁰⁾。それ故、本稿においては、ギデオン物語の構成を、戦略的・戦術的視点から考察したいと考えている。

ギデオン物語は、確かに W. Richter の指摘するいわゆる「戦闘報告 (battle report, Kampfbericht)」の特徴を備えている¹¹⁾。J. Van Seters は、戦闘報告の特徴がアッシリア年代記にも見られるとし、聖書とアッシリア年代記の類似性を指摘した¹²⁾。しかし、アッシリア年代記とギデオン物語には相違点も見られる。例えば、アッシリア年代記によれば、アッシリア軍は敵に対し軍勢の絶対多数の故に恐怖を与え勝利しており、戦後も戦利品や朝貢目録を重要視した記述になっている。また、そこには、ギデオン物語に記されているような神と指導者との交流の詳述はない。さらに、アッシリア年代記に描かれている戦争は平和回復を目的とした正義の戦争ではなく明らかに侵略戦争であり、ギデオン物語の描く戦争と質を異にしている¹³⁾。本稿では、ギデオン物語を、神の民イスラエルの信仰の枠の中で記された戦争の記録であることに留意しつつ考察したいと考えている。

II

イスラエル軍 (ギデオン) とミディアン軍の戦いの軍事的進展は、下記の通り概観される。

<6:1-6:10> 戦前の状況

イスラエル…防禦

ミディアン軍…攻撃

<6:11-6:32> 防禦から攻撃へ

イスラエル…ギデオンの召命とバアル祭壇・アシェラ像の排除

<6:33-35> 両軍の結集・対峙

イスラエル軍…アビエゼル・アシェル・ゼブルン・ナフタリの参戦
(三万二千人)

ミディアン軍…イズレエルの平野に布陣 (一三万五千人)

<6:36-40> 羊毛のしるし

<7:1-8> 本陣形成

イスラエル軍…エン・ハロドに移動・精鋭三百人の選出

ミディアン軍…モレの丘のふもとに布陣・宿営

<7:9-7:14> 偵察活動

イスラエル軍…ギデオンとプラによる偵察

ミディアン軍…ギデオン軍に敗北することを予測

<7:15-7:22> 会戦 (夜戦)

イスラエル軍…具体的な戦術 (三隊構成, 角笛・水がめ・松明)

ミディアン軍…同士打ち・敗走

<7:23-7:25> 援軍による追撃

イスラエル軍…ナフタリ・アシェル・マナセ・エフライムによる追撃

ミディアン軍…將軍オレブとゼエブの捕縛

<8:1-8:3> エフライム同盟問題

<8:4-12> ギデオン本隊による追撃

イスラエル軍…本隊三百人による追撃

ミディアン軍…王ゼバとツアルナムの捕縛

<8:13-17> 帰還

イスラエル軍…スコトとペヌエルへの報復

<8:18-21> 戦いの終結

イスラエル軍…ゼバとツアルナムの報復を処刑

<8:22-8:35> 戦後の状況

上記の軍事的展開の梗概に沿って、戦略的・戦術的視点からの考察を以下に列記する。

A. <6:1-6:10> 戦前の状況

士師記6章1-6節に描かれているミディアン軍の戦略は合理的である¹⁴⁾。例えば、「いなごの大群」(6:5)の描写のごとくミディアン軍は十三万五千人の軍勢(8:10)を結集させたが、この数は、紀元前1280年のカデシュの戦いにおけるラメセス軍二万人、ヒッタイト軍一万七千人、また、紀元前900年から612年のアッシリア軍全体の規模が一〇万人から二〇万人と推定されていること、さらに、紀元前333年のイッソスの戦いでアレキサンドロス軍が総兵力四万五千人、ペルシャ軍が総兵力四万人を結集させたことなどと比較しても決して少なくない数である¹⁵⁾。クラウゼヴィッツが『戦争論』で「兵数の優勢が戦闘の結果を決定するもっとも重要な要因である」「最上の戦略は、第一に、一般に常に強力な兵力を持つこと、第二に、決定的な地点で強大な兵力を持つことである」「ある衝突のために予定されている兵力は、すべて同時的に使用されねばならぬ。このことは、戦争の根本法則の一つであるように思われる」と記しているように、ミディアン大軍のイスラエルに対する軍事的優位は決定的だった¹⁶⁾。このような大規模な遠征を成功させるためにミディアン軍は、補給路を整備している。「彼らは家畜と共に、天幕を携えて上って来たが、それはいなごの大群のようで、人もらくだも数知れなかった」(6:5)の記事における「天幕」は兵士の休息場であり、「らくだ」は歩兵が急勾配の道を進軍する時に必要な輜重隊として用いられたものだったと考えられる¹⁷⁾。

B. <6:11-6:32> 防禦から攻撃へ

ミディアン軍の侵略に対しイスラエルの民は「彼らを守るために山の洞窟や、洞穴、要塞を利用した」(6:1)の記述の通り「防禦」戦術をとった。クラウゼヴィッツは、防禦が、攻撃に対し自軍を「維持する」だけの消極的な形式であり、「防禦者がある程度の利益をえたならば、その仕事は終わったといえるが、滅亡の危険に身をさらしたくないと思えば、この利益の保護のもとに反撃に出ることが必要である」と攻撃に転ずる必然性を説いている¹⁸⁾。即ち、ミディアン軍の侵略が「彼らはイスラエルの人々に対して陣を敷き、この地の産物をガザに至るまで荒らし、命の糧となるものは羊も牛もろばも何も残さなかった」(6:5)、「イスラエルは、ミディアン人のために甚だしく衰えたので、イスラエルの人々は主に助けを求めて叫んだ」(6:6)と記されているようにイスラエルの徹底的壊滅を予感させるものだったので、イスラエルが防禦から攻撃へとその戦略を転換させる状況は熟していたと考えられる¹⁹⁾。

6章11節から32節は、ギデオンの召命、および、ミディアン軍との戦争の直接原因となるバアル祭壇・アシェラ像排除の記事である。御使いを通してギデオンに与えられた主の召命の言葉「あなたのその力をもって行くがよい。あなたはイスラエルを、ミディアン人の手から救い出すことができる。わたしがあなたを遣わすのではないか」(6:14)の中の「あなたのその力」は、聖戦を暗示する神起源のカリスマ的なものではなく、「出エジプトの神を信じる信仰を力とせよ」の意味で語られたと解される²⁰⁾。また「ミディアン人をあたかも一人の人を倒すように打ち倒す」(6:16)は、特定の戦役においてギデオンがミディアン軍に勝利する保証を与えるのではなく、戦争全体を動かすにふさわし資質を備えた者の選びを表わす言葉だった。クラウゼヴィッツが基本的な戦略要素として挙げた「精神的要素」、即ち、「將軍の才能」を備えた者としてギデオンを召した²¹⁾。ギデオンは「もし御目にかないますなら、あなたがわたしにお告げになるのだというしるしを見せてください」(6:17)と語り、召命のしるしを求めて

いるが、6章11節から32節までの箇所においてそれはまだ明らかにされていない。

C. <6:33-35> 両軍の結集・対峙

ギデオンは、角笛を吹いてアビエゼル人を、さらに、使者を送ってマナセ、アシュル、ゼブルン、ナフタリを招集している。34節の「主の霊がギデオンを覆った」の表現の字義的直訳は「主の霊がギデオンを着た」である。この表現は、兵士を招集する手段である角笛の音や使いたちの伝言が、ギデオン自身の能力や手腕の故に発出されたものではなく、ギデオンの内に存する主の権威によって発出されたことを示す意図のもとに記された表現と考えられる²²⁾。招集された兵士たちにとってこの戦争を戦う意義は、ミディアン人の侵略を退け平和を回復する「正義の戦争」であると同時に、神の命じた戦いという意味での「聖戦」に参加することにあつた。メギドの戦いでトトメス軍が敵であるカデシュ軍の財産を略奪することに夢中になりメギド陥落に7ヶ月を要したことを Yigael Yadin は「訓練の足りない、無規律な軍隊に特有な現象」と記しているが、そのようなことと対照的に、ギデオン軍の指揮は非常に高かったと推定される²³⁾。

D. <6:36-40> 羊毛のしるし

多くの注解者たちは、この羊毛のしるしの記事を場違いな記述だと説明する。例えば、J.A. Soggin は、霊の授与 (6:34) や軍の招集 (6:35) の後に位置する文脈から考えて不調和だと説明する²⁴⁾。なぜなら、Soggin は、14節の「あなたのその力をもって行くがよい」を神の力の付与と解し、また、34節の「主の霊がギデオンを覆った」をカナン宗教と戦う力が神より授与されたと解するからである²⁵⁾。しかし、本稿のように、前者を「出エジプトの神を信じる信仰を力とせよ」、後者を「角笛の音や使いたちの伝言が、ギデオンの内に存する主の権威によって発出された」の意味に解すならば、ギデオンが召命に従って主の命令に歩んだとしても、十三万五千人のミディアン軍勢を目の当たりにした時、17節の「もし御目にかないますなら、あなたがわたしにお告げになるのだという

しるしを見せてください」の質問に対する確かな答えを得たいと再び願うことは自然だと解される。むしろ、ミディアン軍との軍事衝突が具体化したこの時にこそ羊毛のしるしの記事は相応しいと思われる。

E. <7:1-8> 本陣形成

ミディアン人は、この時代、既に東方の民族と連帯し、シナイ半島やヨルダン川東域で活動していた²⁶⁾。アラビヤ中央部のカルコル (8:10) からエズレル溪谷に至るには、Wadi Sirhan (caravan route) を北上し、ラバから「王の道」を通り、ヤボク川から西に進み、ペヌエルを過ぎてスコテに至り、さらにヨルダン川東岸を北上し、アベル・メホラ付近でヨルダン川西岸に渡りエズレル溪谷に入ったと考えられる。さらに、ミディアン軍がモレの丘の北部山麓に達するルートは、ベテシャンからエズレル溪谷に入りハロド川沿いを西方に進むか、もしくは、北方のタボル川の溪谷を西方に進むかのいずれかであると考えられる。どちらのルートを選択しても、ヨルダン川 (標高マイナス 280 m) からかなりの上りを経なければならぬ。彼らは、モレの丘の北側山麓の平地に陣を敷いたが、それはエズレル溪谷一帯だけでなく「海の道」を経由してガザに至る沿岸地域をも視野に入れての布陣だった。

他方、ギデオン軍はエン・ハロド (ハロドの泉) 付近、ギルボア山脈の山腹に陣を敷いた (7:1)。ギデオンの町オフラ (6:11) の同定に関し、モレの丘の東方 10 km の町 et-tayibe やアフラやベテシャンなどが候補に上がっている²⁷⁾。アフラを有力視する理由は、アフラからモレの西側山麓を通り北東に至る道を利用し、モレの丘 (標高 515 m) 北側斜面から下るならば、ミディアン軍の陣営全域 (標高 150 m-250 m) を容易に見下ろせるからである (7:8-14)。また、アフラからハロドの泉へ至るエズレル溪谷の道はモレの丘によって遮られており、ギデオンはミディアン軍に邪魔されることなく精鋭三百人を選ぶことができたと考えられるからである (7:4-7)²⁸⁾。

敵地に侵入する遠征軍にとって補給の確保は重要課題である。ナポレオン軍

が、行軍中に食料を調達し「戦争の費用は戦争でまかなった」り、昔の將軍たちが戦場として農作物の実っている敵地を選んだのも補給の重要性を認めた故だった²⁹⁾。「イスラエルが種を蒔くと、決まってミディアン人は、アマレク人や東方の諸民族と共に上って来て攻めたてた」(6:3) ことも当然だったと理解される。また、水の確保も重要だった。逆に、敵の水源を断つことが自軍に有利に働くことは明らかである。紀元前 479 年のペルシャ軍五万人とギリシャ軍四万人が対峙したプラタイアイの戦役において、ペルシャの將軍マルドニオスは、ギリシャ軍を戦闘の場に引き出すために、ギリシャ側の主な給水源となっていた泉を汚して使えなくしている³⁰⁾。

ギデオン軍が本隊を三百人に縮小している。これは、主の言葉「あなたの率いる民は多すぎるので、ミディアン人をその手に渡すわけにはいかない。渡せば、イスラエルはわたしに向かって心がおごり、自分の手で救いを勝ち取ったと言うであろう。それゆえ今、民にこう呼びかけて聞かせよ。恐れおののいている者は皆帰り、ギレアドの山を去れ、と」(7:2-3) の言葉に従ったからであるが、戦略的にも妥当な選択の一つだったと評価し得る。ギデオンは三百人を百人ずつの三組に分けた。これは、少人数構成の三中隊に相当する戦力の歩兵部隊を編成したことになる³¹⁾。持てる兵力(三万二千人)を総動員しても「絶対的優勢を確保できない場合には、その兵力を巧妙に使用することによって、決定的な地点に相対的な優勢を作り出す」³²⁾ ことが戦略となってくる。ギデオン軍にとって現実的な戦術は、本戦において敵の勇氣に致命的な打撃を与え、相手に混乱状態を生じさせる奇襲だった³³⁾。しかも、自軍にとって退却し易い夜間の奇襲は、必然の選択だったと考えられる³⁴⁾。奇襲は、たとえ少人数の軍勢であっても、プラタイアイの戦役でスパルタの一兵士がペルシャの將軍マルドニオスを倒したとき、ペルシャ全軍がパニックに陥り敗走した例や、桶狭間の戦い(1560年)で織田信長軍五千人(一説では七百人)が二万五千人の今川義元軍を奇襲で打ち破った例が示す通り、十分勝機のある戦術である³⁵⁾。しかも、夜

間の奇襲となれば、敵は、兵力集中が困難になり戦力の差はさらに小さくなると予想される。それ故、ギデオンが三百人の精鋭軍を編成したことは特別奇異な戦術ではなかった。

F. <7:9-7:14> 偵察活動

偵察活動と会戦は密接に関連している。クラウゼヴィッツが「一般に人間というものは、善いことよりは悪いことの方を信じやすく、また悪いことは実際以上に誇張して考えやすい傾向をもっている」と記すように、指揮官は、誇張されたり誤った情報ではなく正確な情報に基づいて適切な戦術を兵士に指示しなければならない³⁶⁾。アレキサンドロスは前もって情報を入手しなければ決して重要な戦術的決定を下さなかったと言われている³⁷⁾。この時、ギデオンとプラハは、主の言葉に従って偵察活動を行い、会戦のために必要な情報を収集したと解し得る。羊毛のしるしはギデオンに「召命」の確信を与えるしるしだった。しかし、ギデオンには、ミディアン軍との会戦に「勝利」を取る確信がさらに必要だったと考えられる³⁸⁾。闘争が、敵味方の肉体的諸力だけでなく精神的諸力のぶつかりあいであり、むしろ精神の状態こそ軍事力に決定的な影響を与えるクラウゼヴィッツが解説しているように、ミディアン兵士のつぶやきの言葉は、ミディアン軍の戦闘意欲の低下、さらには敗北を予示するものだった³⁹⁾。

G. <7:15-7:22> 会戦（夜戦）

角笛 (שופר) が旧約聖書に最初に登場するのは、モーセが十戒を受けたシナイ山における神顕現の場面である。出エジプト記には、

「…雷鳴と稲妻と厚い雲が山に臨み、角笛の音が鋭く鳴り響いたので、宿営にいた民は皆、震えた」

(出 19:16)

「角笛の音がますます鋭く鳴り響いたとき、モーセが語りかけると、神は雷鳴をもって答えられた」

(出 19:19)

「民全員は、雷鳴がとどろき、稲妻が光り、角笛の音が鳴り響いて、山が煙に包まれる有

様を見た。民は見て恐れ、」

(出 20:18)

と記されている。雷鳴、稲妻、角笛の音は、神顕現の象徴だった。また、それらは、逆に、民たちに神顕現を連想させた。神の顕現は、神に従う者には救いの時、不信仰な者には裁きの時だった。いずれにせよ、イスラエルの民にとって神顕現は畏るべき時だった。

他方、ミディアン人は、イスラエルと親戚関係にあるイシュマエル人であり(士 8:24)、特に、モーセのしゅうとエトロがミディアンの祭司だったこともあり(出 2, 18 章)、シナイ山での出来事を充分承知していたと考えられる。彼らにとっても、雷鳴、稲妻、角笛の音は、畏るべき時を知らすものだった。しかも、彼らは、神がギデオンの軍勢に味方していることを、既に、夢で知らされていた(士 7:13-14)。それ故、闇夜に広がる水がめの碎ける音、松明の輝き、角笛の音は、ミディアン人にとって、まさに、神顕現を告げる雷鳴、稲妻、角笛の音の象徴として聞こえた。同時に、「主のために、ギデオンのために剣を」というギデオン軍の関の声は、神の指揮に従って戦う神軍の声として響き渡った。

一見完全のように見える軍隊であっても、いったん失敗すると、たちまち不安と恐怖の中で混乱し、「われがちに逃げ出す」醜態に陥ってしまう⁴⁰⁾。水がめ、松明、角笛を用いて敵を不意に驚かすという戦闘は、神の介入による超自然的なものではなく、上記の背景を考慮に入れるなら、イスラエルにとってミディアン人と戦う現実的戦術だったと評価し得る⁴¹⁾。

H. <7:23-7:25> 援軍による追撃

クラウゼヴィッツは、追撃に関し「追撃がなければ、勝利は大きな効果をもたえないということは、どんな事情のもとでも、真実である」と述べ、会戦における勝利がどんなに確実であっても、同日中に開始される追撃によって完成されないかぎり、戦争の終結はないと論じている。追撃によって、勝利の具体

化とも言うべき戦利品が得られるからである。それ故、強烈で迅速な追撃によって、敗走する敵軍に会戦以上の甚大な損害を与えることができ、勝利を不動のものにできる。しかも、追撃が夜間になされる場合、その効果は比類なきまでに強化される⁴²⁾。

クラウゼヴィッツは、本隊の疲労を考えるならば、追撃は会戦に続き一兩日中に完遂されねばならぬと説いているが、ギデオン軍の場合、本戦に参加した兵力は三百人であり、予備役的勢力が、少なく見積もっても、三万人以上温存されていたと考えられる状況にあった。しかも、本戦で既に勝利し圧倒的な劣勢を逆転させたこの時、第二戦の追撃戦にイスラエルの持てる兵力すべてを動員することは戦略的に妥当な決断だったと考えられる⁴³⁾。「イスラエル人はナフタリ、アシェル、全マナセから集まり、ミディアン人を追撃した。ギデオンは、使者をエフライム山地の至るところに送って、言った。『下って来て、ミディアン人を迎え撃ち、ベト・バラまでの水場とヨルダン川を占領せよ。』エフライム人は皆集まって、ベト・バラまでの水場とヨルダン川を占領した」(7:23-24)の記述の通りイスラエル援軍のミディアン軍への追撃は強力なものだったと推定される。

ギデオンの戦いの記事が7章25節のオレブとゼエブの捕縛と処刑をもって終結したならば、会戦に至るまでの詳細な記述と比較して、追撃の記述内容が「戦闘報告書」の様相を呈した余りにも単純なものになってしまう。6章から7章の記述が8章の記事へと連続することは、ギデオン物語の戦略的推移の視点から調和のとれた記述になっていると評価される。

I. <8:1-8:12> エフライム同盟問題とギデオン本隊による追撃

追撃は動員できる限りの兵力で行うのが効果的だが、ここでエフライム同盟問題(8:1-3)が生じている。エフライムは、本戦参加のための招集を受けておらず(6:35)十分な臨戦態勢が整っていなかったと推定される。突然の追撃戦に参加したとはいえ(7:24-25)、追撃範囲がトランス・ヨルダン地域に展開し、

遠くカルコル方面(8:10)に拡大するに至り、参戦を辞退したのではないかと想定される。戦場が被侵略国の領土の範囲内であるならば、人民軍的に招集された各部族兵の参戦は妥当であるが、戦線が東部方面に拡大するに至り、ギデオンを中心としたアビエゼル人三百人からなる本隊のみの追撃体制に絞られたと想定される⁴⁴⁾。それ故、8章1-3節のエフライム同盟問題の記事は、4節以下の本隊による追撃の記事につながっている。カルコルにいるゼバとツアルナムの軍勢一万五千人は、既に戦意を喪失しいわゆる遁走状態に陥っている軍であり、人数は多いがもはやギデオン軍の敵ではなかった。

問題は、ギデオン本隊がヨルダン川からカルコルまでの約200km余りの行程を追撃可能だったかである。例えば、メギドの戦いにおいてトトメス軍はエジプトからガザまで一日平均およそ15マイルの割合で行軍したし、フィリッポスのマケドニア軍は、武器、兜、盾、脛当てを身に付けた兵士が約37マイルの訓練行軍を行ったと記録されている⁴⁵⁾。機動性のある三百人のギデオン軍にとってカルコルまでは2-3日の旅程だったと想定し得る。無論、ペヌエルやスコトで補給を求めることは、ギデオン軍にとって重要なことだった。

J. <8:13-21> 帰還・戦いの終結

追撃はゼバとツアルナムの捕縛・連行をもって終結している。即ち、ミディアン軍の侵略に対抗して行われた一連の戦いの最終目標がミディアンの王ゼバとツアルナムの捕縛・連行だった。なぜ、将軍オレブとゼエブではなくこの二人の王が重要だったのか。その問題を解く鍵が8章18節「お前たちが、タボルで殺した人々はどこにいるのか」である。この問いは、単純に場所を聞く疑問文ではなく、**אֵימָה אֵימָה** “Where is the Lord?” (エレ2:8, イザ63:11など)の用例のように、熱心な探求心を示す修辞表現と考える。即ち、ギデオンの言葉は、二人のミディアン王と共有していた事実(旧情報)である「タボルでイスラエルの人々を殺害した」を手掛かりに、二人の王がその殺害の主体者であることを確認しようとして発せられた談話だったと考えられる。語り手は、ギデ

オンの発話に対する王たちの応答として「あなたによく似ておられました。皆、王子のような風貌でした」の言葉を記す。ここに至り、ギデオンの兄弟を殺した責任者が同定された。19節の「主は生きておられる。もしお前たちが彼らを生かしておいてくれたなら、お前たちを殺さないのに」の言葉は、これまでのギデオンの行動全体が一定の法的手続きに従っていたことを暗示する。即ち、二人の王の処刑は、単なる個人的復讐 (murder) などではなく、部族全体の法秩序を維持するためのタリオ定式に従った行動だったと評価し得る。ギデオンの兄弟たちを「刺し殺した」二人の王は、同じように刺し殺されねばならなかった⁴⁶⁾。この記事により、ミディアン人によるイスラエル人抑圧の実態の一端、および、ギデオン本隊のカルコルに至るまでの追撃の動機、さらには、ギデオンの戦いの「正戦性」が明らかにされた。

III

上記の通り戦略的視点からの考察より、ギデオン物語が戦いの流れに沿って漸進的に展開する統一的物語であり、そのクライマックスが8章13節から21節の記事、即ち、ミディアン王、ゼバとツアルナムの裁きの記事にあると考えられる。ギデオンの戦いは、主によって命じられた戦いとの意味において「聖戦」だった。同時に、侵略者によって破壊されたイスラエルの平和を一定の法手続きに従って回復させたとの意味において、まさに「正義の戦争」だったと評価し得る⁴⁷⁾。

注

- 1) 本稿は、1998年5月27日に日本旧約学会東部部会にて発表された。
- 2) ファイファー『旧約聖書緒論』第三卷(新教出版社、1962年)37-72頁。石田友雄「第四章歴史文学」『総説旧約聖書』(日本基督教団出版局、1984年)217頁。
- 3) Robert G. Boling, "Judges," *Anchor Bible Dictionary*, 1992, 3: 1115-6., A・ヴァイザー『旧約聖書緒論』(聖文社、1970年)177-189頁。Martin Noth, *The Deuteronomis-*

- tic History*, trans. Jane Doull and et al., JSOT no. 15 (Sheffield: JSOT Press, 1981 [1975]), pp. 45-46, 84-88.
- 4) ラートは、ギデオン軍が全イスラエル全部族から構成されたのではなくマナセ族のアビエゼル人主体の軍隊であるとの理由で、ギデオンの戦いを典型的な聖戦と断定することに躊躇している。Gerhard von Rad, *Holy War in Ancient Israel*, trans. and ed. Marva D. Dawn (Grand Rapids: Eerdmans, 1991 [Der *Heilige Krieg im alten Israel* (1958)]), pp. 61-2.
- 5) Robert G. Boling, *Judges*, The Anchor Bible no. 6A (N.Y.: Doubleday, 1975), p. 30.
- 6) R.K. Harrison, *Introduction to the Old Testament* (Grand Rapids: Eerdmans, 1969), p. 685., J. Gordon McConville, "The Old Testament Historical Books in Modern Scholarship," *Themelios* 22 (3, 1997), pp. 3-13.
- 7) 例えば、Lilley や Gale は、士師記の導入部分 (1:1-3:6) や結語部分 (17-21 章) を本体部分と同一著者による作品と考え、内容の連続や進展に注目している。J.P.U. Lilley, "A Literary Appreciation of the Book of Judges," *Tyndale Bulletin* 18 (1967), pp. 94-102., Gale A. Yee, "Introduction: Why Judges?," in *Judges & Method: New Approaches in Biblical Studies*, edited by Gale A. Yee (Minneapolis: Fortress, 1995), pp. 1-16.
- 8) D.W. Gooding, "The Composition of the Book of Judges," *Eretz-Israel* 16 (1982), 70-79.
- A Introduction Pt. 1 (1:1-2:5)
- B Introduction Pt. 2 (2:6-3:6)
- C Othniel (3:7-11)
- D Ehud (3:12-31)
- E Debora, Barak, Jael (4:1-5:31)
- F Gideon (6:1-8:32)
- E' Abimelech, Tola, Jair (8:33-10:5)
- D' Jephthah, Ibzan, Elon, Abdon, (10:6-12:15)
- C' Samson (13:1-16:31)
- B' Epilogue 1 (17:1-18:31)
- A' Epilogue 2 (19:1-21:25)
- 9) J. Paul Tanner, "The Gideon Narrative as the Focal Point of Judges," *Bibliotheca Sacra* 149 (1992): 146-61.
- A 6:1-10
- B 6:11-32
- C 6:33-7:18
- B' 7:19-8:21
- A' 8:22-32

- A The Spirit-endowed Gideon...(6 : 33-35)
 B Gideon sought a sign...(6 : 36-40)
 C With the fearful Israelites having departed, ...(7 : 1-8)
 C' With fear still in Gideon himself, ...(7 : 9-11)
 B' God provided a sign to Gideon...(7 : 12-14)
 A' The worshipping Gideon...(7 : 15-18)
- 10) J. Barr, "The Synchronic, the Diachronic and the Historical: A Triangular Relationship?" in *Synchronic or Diachronic?: A Debate on Method in Old Testament Exegesis*. ed. J.C. DeMoor (Leiden, N.Y.: Brill, 1995), pp. 1-14.
- 11) 「戦闘報告 (battle report, Kampfberich)」の特徴として、下記の項目が挙げられている。
 移動を表す動詞 (verbs of movement, בוא הלך זא)
 軍事行動を表す動詞 (verbs of military activities, נלחם הנה אסף)
 戦闘行動を表す動詞 (verbs indicating the outcome of the battle depending on the object: city לקח לכר, person נכה ננג)
 勝利の記事 (a description of the defeat)
 6 : 1-8 : 35 では、הלך (8 : 1), בוא (7 : 17, 19), הנה (6 : 4, 33, 7 : 1), לכר (7 : 24, 25, 8 : 12), נכה (8 : 11) などの事例が散見される。
 W. Richter, *Traditionsgeschichtliche Untersuchungen zum Richterbuch*, Bonner Biblichen Beiträe 18 (Bonn, Hanstein, 1966), pp. 262-64., D.M. Gunn, "Narrative Patterns and Oral Tradition in Judges and Samuel," *Vetus Testamentum* 24 (1974) : 286-7.
- 12) John Van Seters, "The Conguest of Sihon's Kingdom: A Literary Examination" *Journal of Biblical Literature* 91 (1972) : 187-8. James B. Prichard, ed., *Ancient Near Eastern Texts: Relating to the Old Testament* (Princeton: Princeton Univ. Press, 1969), pp. 275-301.
- 13) 拙論「旧約聖書の戦争に関する研究小史」『福音主義神学』27 (1996年) 5-29頁。
- 14) 拙論「ギデオンの戦いの背景—士師記6章1-6節—」『東北学院大学宗教音楽研究所紀要』第2号 (1998年) 5-8頁。
- 15) アーサー・フェリル『戦争の起源』(河出書房新社, 1988年 [1985年]) 82, 102, 284-5頁。
- 16) クラウゼヴィッツ『戦争論』淡得三郎訳 (徳間書店, 1997年) 173, 181-2頁。[Carl von Clausewitz, *Kriegstheorie und Kriegsgeschichte*, Bibliothek der Geschichte und Politik no. 23 (Frankfurt: Deutscher Klassiker Verlag, 1993 [1832-34])]. クラウゼヴィッツ (1780-1831) は、プロシヤの軍人で、ナポレオン時代のあまたの戦争に参加した。1815年のワーテルローの戦役に参加した後、ベルリンの士官学校の校長に任命され1830年までこの職にあり、この期間の思索と研究が『戦争論』として死後発表されたといわれている。また、アレキサンドロス時代からワーテルロー戦役までの2000年間は、軍事技術上驚くべき連続性があり、それが絶ち切られたのは、

- 19 世紀および 20 世紀の産業革命の結果であった評価されてる。即ち、クラウゼヴィッツ『戦争論』を古代の戦争を理解するための注解書として用いることは可能と考える。フェリル『戦争の起源』14 頁。
- 17) サルゴン二世がらくだを輜重隊に使っている。フェリル『戦争の起源』112 頁。
- 18) クラウゼヴィッツ『戦争論』263 頁。
- 19) クラウゼヴィッツ『戦争論』263 頁。道下得成「戦争と技術」『戦争—その展開と抑制—』（勁草書房、1997 年）80-88 頁。
- 20) 拙論「ギデオンの戦いは聖戦か」『東北学院大学キリスト教研究所紀要』第 15 号（1997 年）17-19 頁。
- 21) クラウゼヴィッツ『戦争論』154-171 頁。
- 22) 拙論「主の霊は『覆う』のか『着る』のか」『Exegetica—旧約釈義研究—』第 8 号（1997 年）25-34 頁。
- 23) Yigael Yadin, *The Art of Warfare in Biblical Lands: In the Light of Archaeological Study* (N.Y.: McGraw-Hill, 1963), 103., フェリル『戦争の起源』81-82 頁。
- 24) J. A. Soggin, *Judges*, Old Testament Library (London: SCM Press, 1981), p. 131-2.
- 25) Soggin, *Judges*, p. 116, 130.
- 26) “The Midianites were a semi-nomadic people who inhabited northern Arabia or the Sinai peninsula. (Gen. 25:2ff, Ex. 18:1ff. Num. 10:29-31.) However, already in Num. 22:4-7 we find a coalition of Midian with Moab against Israel, while in Num. 25:6-18, they and Moab lead Israel astray at Baal Peor, cf. 31. These are features which serve to show that groups of Midianites had also reached southern Transjordan.” Soggin, *Judges*, p. 107.
- 27) Soggin, *Judges*, p. 114.
- 28) C. Herzog and M. Gichon, *Battles of the Bible* (London: Greenhill Books, 1997), pp. 73-4.
- 29) フェリル『戦争の起源』236, 270 頁。
- 30) フェリル『戦争の起源』172 頁。
- 31) ジェイムズ・F・ダニガン『戦争のテクノロジー』（河出書房新社、1986 年）20 頁。軍隊を三つの戦闘集団にわけた戦術は紀元前 1458 年のメギドの戦いにおいてトウトメスが採用している。フェリル『戦争の起源』81 頁。
- 32) クラウゼヴィッツ『戦争論』174 頁。
- 33) クラウゼヴィッツ『戦争論』174-5, 224, 244 頁。
- 34) クラウゼヴィッツ『戦争論』233-34 頁。
- 35) 戦国合戦史研究会『戦国合戦大辞典』第三巻（新人物往来社、1989 年）108-113 頁。
- 36) クラウゼヴィッツ『戦争論』163 頁。
- 37) フェリル『戦争の起源』265 頁。
- 38) 「指揮官にとっては、正確で適切な観察力の方が、詭計よりももっと必要で有用な資質であるということができよう。」クラウゼヴィッツ『戦争論』180 頁。

ギデオン物語における戦略と戦術

- 39) クラウゼヴィッツ『戦争論』115, 127 頁。クラウゼヴィッツは、戦争を物質ではなく精神的要素を重視した視点から議論している。
- 40) クラウゼヴィッツ『戦争論』165 頁。
- 41) 拙論「ギデオンの戦いは聖戦か」20-21 頁。拙論「ギデオンの戦い（士師記7章）における角笛（שופר）」『東北学院大学音楽研究所紀要』創刊号（1997年）5-6 頁。
- 42) クラウゼヴィッツ『戦争論』247-8, 250-3 頁。
- 43) クラウゼヴィッツ『戦争論』184-5, 189, 227, 248 頁。
- 44) クラウゼヴィッツ『戦争論』293-300 頁。
- 45) フェリル『戦争の起源』78, 268 頁。
- 46) H・J・ベッカー『古代オリエントの法と社会』（ヨルダン社，11989年[1984年]）267-273 頁。
- 47) 拙論「旧約聖書の戦争に関する研究小史」5-29 頁。